

柏木英彦著『アベラール 言語と思惟』

創文社，1985年，218頁

岩熊幸男

アベラールはその全体像を捉えるのが困難な人物である。12世紀の著作家の中ではおそらく最も長い研究史があるにも拘らずである。彼の各著作を理解するには、彼の活躍した12世紀という時代についての広い知識を必須とする。例えば、評者の専門とする論理学について言えば、彼の用いる用語の一つ一つが、13世紀以降のそれとは大きく異なった意味合いを持っている。その意味を確定するには同時代の論理学について広く研究する必要が生じる。そしてそのような研究は近年ようやく実を結び始めたところである。論理学以外の他の分野についても、事情はおそらく同様であろう。1979年はたまたまアベラール生誕900年にあたり、各分野の研究者が集まって多くの国際会議が開かれた。こうして、各分野でのアベラール研究を総合して始めて得られる彼の全体像が今日ようやく明らかになりつつある。

このような時期に、これらの研究を十分に踏まえた上で書かれた本書が現われた。アベラールについて日本語で書かれたおそらく最初の研究書であろう。しかも、今日最もふさわしい人の手になった研究書である。著者は、前著『中世の春』（1976年，創文社）以来、日本には本格的研究者の数少ない12世紀ヨーロッパの精神史を一貫して追求しておられる。その「12世紀精神史の一齣として」（跋）、著者独自の観点からアベラールの全体像にとりくまれたのである。

本書は四つの章からなる。第一章「生涯と著作」のあと、残る三章でアベラールが活躍した各分野、すなわち神学・論理学・倫理学がそれぞれ論じられる。以下各章について、その内容を簡単に紹介するとともに、それを読みながら評者の感じたところを記してみたい。

第一章は、第一節「弁証法の騎士」と第二節「著作の命運」からなる。前者ではアベラールの生涯と各著作の執筆年代の決定が、後者では彼および彼の学派に属する諸著作

に関して、現存写本の状態から知りうる中世での読まれ方と近世以降の刊本の歴史が、それぞれ要領よく概観されている。ただ、アベラールの生涯を記すにあたって次の論文を著者が考慮に入れられなかったことを、評者は少しく奇異に感じた。R.-H. Bautier “Paris au temps d’Abélard”, *ATJ* (著者の省略符号) 所収。このポワチエ論文は、アベラールの生涯を当時の政治的状況の中に置いて論じるという画期的な視点で書かれたもので、個々の伝記的事実の年代決定に関しても従来の説を多くの点で説得的に修正している。評者の見るところでは、アベラールの伝記を記す者には無視できない重要性を持つものと思われるからである。

第二章「言語論理的思惟」では、三位一体論を中心としてアベラールの神学が扱われる。

12世紀の神学では論理学用語が重要な役割を果たしていた。特に三位一体論では、その主要典拠であったボエチウスの神学諸著作以来その傾向が顕著である。また、12世紀の論理学の方は、同時代の文法学との密接な関連のもとに発展していた。第二章第一節「文法学と思惟」では、文法学上の用語がポワチエのジルベルトゥスの三位一体論の中でどのような役割を果たしているかが論じられる。これは、アベラールの教説——次節以降に論じられる——の中の同様な側面を論じるための巧妙な伏線となっている。なお、当時の文法学と論理学との関係について「文法学が論理学に浸透し」(p. 58)と著者は表現されている。これは、ハントその他の研究者の結論に従われたものではある。しかし、私見によれば、この表現は一面的であって、実際には両分野は相互に浸透しあっていた。すなわち、「文法学に論理学の概念が適用され」(p. 58)のみならず、逆に文法学の(より厳密に言えばプリスキアヌスの)用語や教説が論理学書中でおおいに論じられていたことは、アベラールの諸著作にも明らかである。当時の文法学と論理学は、一方が他方に影響を及ぼしていたというよりも、共に言葉を扱う両分野の間の相違が必ずしも明瞭ではなかったのである。そして、両分野の扱うべき領域を区別しようという意識的な試みがなされたのが、まさにこの時代であった——論理学の側からはアベラールによって、文法学の側からはベトルス・ヘルヤスによって——と評者は考えている。

第二節「弁証論と思惟」では、弁証論(=論理学)との関係から見たアベラールの神学が論じられる。まず、「弁証論は聖なる問題について真理を論証するのではなく、真

実らしさを……提示するにすぎない」(p. 79) というアベラールの採った基本的な立場が示される。従って、「聖なることの内容に関しては、聖書と教父の著作で十分で」(p. 74) ある。そして、それら権威ある著作の内に疑義ないし相矛盾する点が生じた場合にいかに対処すべきかについて、アベラールのあげた明解な指針が『然りと否』から紹介される。最後に、以上に示した基本的な立場からアベラールが三位一体論についてどのように論じたかが詳論される。なお、著者は「弁証論を過度に濫用する徒をソフィストと呼んで非難する」(p. 75) と書かれている。しかし、‘sophista’ という語には当時「詭弁家」というような否定的な意味合いはなく、純然たる「弁証家」の意味で用いられていた。些細なことながらここに指摘しておきたい。

第三節「波紋」では、アベラールの神学が同時代人からどのような批判を呼びおこしたかについて論じられる。アベラールは「理性の力を評価しつつも、……聖なる事柄を十全に論証することは到底でき」(p. 96) ないという基本的立場を堅持していた。「アベラールにとって信仰は発声ではなく、知解である。……しかしその知解は間接的に比喩や類比によるほか」(p. 99) ないのである。アベラールのこの信と知との慎重な区別は、しかし、ラン学派を始めとする同時代の保守的な神学者にはもちろん彼の弟子たちにも充分には理解されなかった。むしろ、「聖なる事柄を理性によって十分に説明」(p. 95) しようとする主知主義の疑いをもたれがちであった。このような誤解の上になって書かれたアベラール非難の諸文書を、著者は順次検討されている。

第三章「意味論的思惟」では、アベラールの論理学から意味論に関わる三つのテーマが論じられる。すなわち、第一節「普通名辞」ではいわゆる普遍問題（特に普遍名辞の表意作用 *significatio*）が、第二節「動詞の機能」では動詞（中でも ‘esse’ という動詞）の表意作用が、第三節では「命題の表意作用」がそれぞれ論じられている。

第二・三節で論じられたテーマはいずれも、アベラールの論理学の中では、第一節に論じられた普遍問題と密接な関係を持つものである。

動詞 ‘esse’ の表意作用に関する問題は、本来は普遍論争とは独立に文法学の内部で生じた問いであった。‘esse’ は「実体的動詞 *verbum substantivum*」と当時呼ばれていた。そして、旧来の説によれば、この動詞は、実体的 *substantivum* な機能によっては *も* のを实体として *in essentia* 示し、動詞 *verbum* としての機能によっては結合作用 *copulatio* を有した。さて、‘esse’ の実体的な機能をめぐって次の問いが生じた。すな

わち、「ソクラテスは人間である *Socrates est homo*」という文中では、‘est’ は確かに実体（ソクラテスと人間）を結合している。しかるに「ソクラテスは白い *Socrates est albus*」という文中では、ソクラテスに結合されている〈白さ〉は実体ではなく偶性である。このような形で生じた問いについて、アベラールの師ジャンポーのギョームは普遍問題と直結する形で論じた（どのように直結させたかをここに論じる余裕はない）。従って、‘esse’ の表意作用に関するアベラールの論述（p. 147 参照）は、ギョームの普遍論に対する駁論の一部を形成しているのである。

命題の表意作用に関するアベラールの根本的な主張は、命題の表意対象 *dictum* がものではないということである。彼の主張によれば、存在するものとはソクラテスなどの個物のみであって、命題「ソクラテスは人間である *Socrates est homo*」の表意対象である〈ソクラテスが人間であること *Socratem esse hominem*〉などというものは存在しないのである。この主張もアベラールにあっては普遍論と直結している。彼の普遍論によれば、普遍とは語 *sermo* であってものではない。語「人間 *homo*」が表意しているのは、何か〈人間〉なるものではなく、ソクラテスならソクラテスというものが〈人間であること *esse hominem*〉という事態 *status* である。そして、ちょうど上述の命題の表意対象〈ソクラテスが人間であること *Socratem esse hominem*〉がものではなかったように、事態〈人間であること *esse hominem*〉もものではないのである。

多岐にわたるアベラールの論理学の中から上述の三つのテーマを著者がとりあげられたのは、それらがすべて相互に密接に関連するものとみなされたからであろう。ただ、それら相互の関連が著者の論述からは必ずしも明確には読みとれないように評者には感じられた。

第四章「文法教育と倫理学」では、神学・論理学以外のアベラールの残存著作『対話』『倫理学』『聖歌』を題材として、倫理に関する彼の教説が論じられる。第一節「文法教育と倫理」では、七自由学芸と神学という従来の学問区分に代えて当時新たに提出された学問区分の中に倫理学が登場しはじめること、また、オウィディウス他の古典作家に対する注解にも「いわゆる教化的解釈 *moralizatio* (p. 171)」が顕著になる事実にも倫理への関心の高まりが見られること、が示される。体系的な倫理学書を著わした最初の人物であるアベラールは、このような時代背景のもとに登場したのであった。第二節「自然倫理と内面化」では、個人の内面を重視したアベラールの倫理説が、善悪・

罪・罪の許しなどについて詳述される。著者はアベラールについて「およそ筆者とは気質の違う人間を前にして筆は洩りがちで、なかなか波長を合わせることができなかった」(跋)と書いておられる。しかしこの最終章では「波長」がぴったり合ったのであろうか、のびやかに筆を動かしておられる。この分野について予備知識の乏しい評者は、多くのことを学ばせていただいた。

著者がまだ論じておられない12世紀の著作家は多い。この時期の精神史に今後とも健筆をふるわれることを期待して、この拙評を終わりたい。

John Corcoran and John Swinarski:
Logical Structures of Ockham's Theory of Supposition.

Franciscan Studies (The Franciscan Institute, New York),
vol. 38, annual XVI, 1978, pp. 161—183.

Graham Priest and Stephen Read: Merely Confused
Supposition, A Theoretical Advance or a Mere Confusion.

Idem, vol. 40, annual XVIII, 1980, pp. 265—297.

渋谷克美

Franciscan Studies に掲載された、これら二つの論文は、オッカムの「代示」suppositio の理論に関する相反する解釈を提示している。これらと関連する論文としては、更にまた、同じ著者 Graham Priest and Stephen Read の“The Formalization of Ockham's Theory of Supposition,” *Mind*, 86 (1977), pp. 109—113, 及び Hermann Weidemann, “William of Ockham on Particular Negative Propositions,” *Mind*, 88 (1979), pp. 270—75. があり、これら四つの論文の関係は次のようになっている。先づ1977年に Priest と Read が *Mind* に、オッカムの代示の理論についての或る一つの解釈を提示しており(論文①)、次に、この解釈の反論として、1978年に Corcoran と Swinarski が *Franciscan Studies* に(論文②)、1979年に Weidemann が *Mind* に